

# 風化をさせはならない

りんごう としや  
林郷 俊也

● J P 労組・中央執行委員

東日本大震災が発生した時は、地方本部の役員として仙台で勤務していました。当日は、検査通院を終えて、組合事務室に戻る途中で、あの大地震を経験しました。

組合事務室が入っている日本郵政グループ仙台ビルに戻りましたが、余震が続き屋外退避の状態、郵便局ロビーのテレビを見ていると宮城県の沿岸部に津波が押し寄せている映像が流されはじめました。しかし、私は直ぐには現実として受け止めることができなかつたことを今でも忘れることができません。

執行部には、陸前高田市出身がおり、彼は地震発生と共に津波の発生を予見としており、被害の甚大さを現実のこととして捉えていたので震えていました。私は、山村の出身であり、地震による津波は理解していたつもりでも、直ちに避難しなければならないということについて、全く想像力がありませんでした。「津波てんでんこ」は、幾度も被害を経験してきた古くからの教えであり、それを実践するためには繰り返しの訓練が必要であることが、その後の実体験に基づく様々な報告を聞いて、改めて考えさせられました。

大地震の直後、組合員の皆さんは極めて実直に仕事に向き合い、作業を再開したり、仲間を心配して避難を躊躇したり、屋外労働のために情報（避難警報）が届かず海岸方面に向かう者もいたり、自らの安全を確保した上で、次の行動に移ることが最優先とはならない状況の中で、

尊い犠牲もありました。

また、福島第一原子力発電所の事故が発生し、正確な情報が伝えられない中で避難生活を余儀なくされる仲間、原発事故による放射線に対する不安の中で業務の再開にむけて尽力する仲間の姿がありました。

この東日本大震災の被害は甚大であり、組合員の被災状況や心の痛みはそれぞれ重いものがあり、報告を聞くたびに胸が締め付けられ、やり場のない怒りの一方で、助け合う姿には熱い思いになります。

自然災害が多発する今日、人命第一の危機管理・防災体制の構築が必要であり、そのためには繰り返しの訓練と、何よりも「あの日あの時を忘れない」ことが必要だと考えています。

福島第一原発事故を中心とした連載が組まれていることから某紙を購読していますが、あの未曾有の大災害を風化させはならないと思います。被災地においては、まだまだ復興に向けた様々な支援が必要であり、復興を目指して力強く取り組んでいる地域、復興計画が進まずに苦慮している地域、3.11から時が止まっている地域があることを忘れずに、様々な形で活動することも自分のテーマです。

J P 労組は、被災地の支部や地域に対する支援を継続して取り組んでおり、東北出身者として全国の仲間の温かいご支援に感謝しながら、絆をつなげていきます。